

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(二)

Parvus, Der Weltmarkt und die Agrarkrisis, Neue Zeit 1895-96.

大 藪 輝 雄
鈴 木 敏 正 共 訳

目 次

- 一 はじめに
 - 二 イギリスとヨーロッパ
 - 三 世界市場におけるドイツの地位
 - 四 都市と鉄道
 - 五 農業の矛盾 (以上前号)
 - 六 工業と農業 (省略)
 - A 工業の発展が穀物価格に及ぼす影響
 - B 工業の発展が地代・借地料および地価に及ぼす影響
 - 七 資本主義的農業恐慌の一般的説明 (省略)
 - A 地代の理論
 - B 恐慌
 - 八 工業生産物市場と穀物市場 (省略)
 - 九 ユンカーの幸福と不幸
 - 十 ロシアとアメリカの競争、経済不況、「農業の困難」
- パルヴス「世界市場と農業恐慌」(一) (大藪・鈴木)

九 ユンカーの幸福と不幸

A 生成過程

ドイツは、イギリスが穀物を購入した最初の国の一つであった。⁽¹⁾ドイツの穀物輸出は、ナポレオン戦争当時にはめざましいものがあつた。一七九五〜九六年にはすでに穀物はプロイセンから輸出する方が輸入するよりも約二〇〇万ターラーだけ多かつた。なるほど、この交易は大、陸、封鎖によって短期間防げられたが、そのかわりにそれに続く英米戦争の時期(一八〇九—一八一七年)にはそれだけいっそう促進された。しかし、穀物輸出が拡大し、資本主義的農業が発展するに

つれて、とりわけ、農奴制にもとづく自然経済を商品生産にかえることが必要になった。これは、周知のように、プロイセンにおいてはすでに述べた穀物輸出拡大の時期におこったのだが、それは、おそらく、穀物輸出なしではおこらなかった。

ともかく、学問的には次のようなことが確認される(クナッパによる)。つまり、「調整(Regulirung)」はグーツヘルによる農民の土地の一部の強制収用を意味したのだが、グーツヘルには農民保有地の三分の一、そして半、分さえも帰属したのである。他方において、物上げ負担(Belastung)の償却は莫大な資本をグーツヘルのふところに投げ入れた。そして、プロレタリア的な農民は「自由な労働者」として彼らの意のままになったのである。かくして新しいユニカーの支配の条件が、

期間	全平均
1770/74	20,457マルク
1775/79	20,352 "
1780/84	23,80. "
1785/89	27,105 "
1790/94	41,235 "
1795/99	55,728 "
1800/04	66,681 "
1805/09	71,253 "

いまや資本主義版でつくり出されたのであるが、同時にまた、その滅亡の前提条件も生まれた。工業的なイギリスとの接触は、魔法の杖にふれたかのよう

に、地代と地価を上昇させた。メクレンボルク、リシエ、ヴィンデでは、世襲自由保有地ないしは自由に譲渡しうる騎士領地は一フ、ト、エ、当りて上掲表のような額になった。⁽³⁾

いかにして一七九〇〜九四年に一挙に地価の大きな上昇がおこり、それからまたそれがさらに持続しているかがわかる。

この地価の激しい上昇(それは地代の上昇を前提とするのだが)の原因は、穀物価格の高騰だけにあるのではない。われわれは穀物価格以外にお、地価高騰の一連の諸原因があるのを知っている。⁽⁴⁾ イギリスの需要の影響の下で耕地は拡大され、同時に小麦作への移行と耕作の集約化がおこった。しかし、このようなことがなくとも、すでに自然経済から商品経済への移行だけでも地価ないし地代の貨幣価値を増大させたにちがいない。

グーツヘルの現物収入がまだ非常に多ければ、その貨幣価値は、とりわけその商品性に依存する。農民への圧迫はきわめて強力なものであり得たが、その結果はいつもおびただしい生産物であって貨幣の富ではなかった。それゆえ、穀物市場がまだ少ししか発達していない時には、たとえば、北部ドイ

ツでは今世紀のはじめ、つまり農奴制の廃止までは、グーツ経営のところには一年中大量の現物のたくわえが集中していたということが理解されるものである。これに対して、貨幣は希少なものであった。しかしながら、地代ないし土地の価値を決めるためには、明らかに、商品価格以外のもう一つの異った視点をとることが有効となるにちがいがなかった。それから、グーツヘルシャフトが現物収入と現物賦役を自由にできる限り、土地収益はグーツ経営の従属のかつ限定された部分であるにすぎなかった。土地収益については、耕地面積・土地の質・農産物価格・現存する建物および在庫ばかりでなく、把握可能な農民の数と貢納支払いの高さが考慮に入れられる。それゆえに、自由に土地購入がおこなわれる場合には、土地は地代の源泉としてあらわれるのではなく、その購入は、ちょうど家畜の購入や経営建物の建築、または、あるグーツヘルシャフトを創設することを見込む場合におけるのと同様に、全体的なグーツ経営上の考慮からおきたのである——なぜなら、価格の規定要因が、もちろん、現在とは異っていたからである。

かくして、イギリスとの貿易による結びつきは、ドイツの

パルルス「世界市場と農業恐慌」(二) (大藪・鈴木)

グーツヘルに、とりわけ、多量の現物から貨幣の富への、土地收穫から資本主義的貨幣地代への転換をもたらした。労働が価値を生むのではなくて、貨幣価値があるのは生産物の自然的特性だという、そして、土地からの地代は穀物・かぶら・じゃがいもと同じように増大するのだという資本主義的虚構が生まれる。地主の貨幣収入は増大し、それは地価を上昇させる。⁽⁶⁾

いま対比してみた差異から、前資本主義における穀物価格の形成は異つたものになるにちがいないということがわかる。地代は個々の生産価格の差違としてはじめに形成されるので、一般的な生産価格はまったく存在しなかったのである。しかし、確かに一つの市場価格は存在した。市場価格にとっては都市の需要が規定的である。非農業人口はなお比較的少なかったたので穀物価格は低かった。

ここで外国、すなわちイギリスの穀物市場を加えてみれば、価格を決定したのはこの穀物市場であった。高い輸送費と、当時の穀物貿易の数多くの仲買人の法外な利益を差し引けば、イギリスの市場価格がドイツの穀物市場において規定的であった。それは国内市場価格よりも重要であった。こうして穀

物価格の上昇がおこるが、それは、耕作面積の拡大によっても、耕作の集約化などによっても資本主義一般としては説明できないだろう。その説明は、むしろ、この資本主義的な諸関係がはじめて形成されたところにあつた。

ユンカーは富裕になつた。しかし、資本主義的な変革過程が完了した時には、次のようなことが示された。つまり、北ドイツにおける穀物の一般の生産価格はイギリスからもちこまれた市場価格よりずっと低かつたこと、その結果、上昇した土地価格は、たいてい、法外につりあげられた絶対地代(それは全く市場の好景気によって条件づけられる)にもとづいたこと、である。市場の景気が変化すると、今度は、花開いた榮光がきわめて急速に崩壊した。それが二〇年代の大農業恐慌であり、その後には他のものが決して比べものにならないほど、急激にやってくる破滅に至るといふものであつた。つまり、これはまだ決して資本主義的農業恐慌ではなく、資本主義的農業の陣痛であつた。

イギリスにとつて、その工業の世界市場支配につれて、ヨーロッパ全体が農産物の仕入れ先として開かれていたということだけでも、市場景気は異つたものになるに違ひなかつた。

その上、戦争後、アメリカとのめざましい穀物交換がはじまつた。

そうするうちに、ドイツのグーツ経営の資本主義的変革もまた穀物流通の増大をもたらしした。それは、単に自然経済から商品経済へと変化したからではなく、グーツへの耕地面積が、「調整」によつて、ユンカー所有地に合体された農民の土地にまで拡大されたからである。

その際に、マクレンブルクのユンカーは農民についての懸案を一掃した。イギリスの穀物需要がおこると、耕地面積を拡大することが彼の最も配慮するところとなつた。

「土地、特に潤葉樹が伐木された土地は、たいていは良質であつたが開墾されていなかった。既耕地、必要な建物さらにはまた牲畜、これらは農民のところにあつた。この土地と経営手段を含めた農民のフーフエは、ほとんど費用も特別の条件もなしに手に入つた。一六二二年二月一六日に、次のようなことが法律で決められた(それは現在「一八六九年」もなお有効である)。すなわち、永小作権を立証できなかった農民たち——保おおよび時効はこのような人々を保護しない——、彼らは地主(彼らはいいていその農奴だつた)に、解約通告後、無条件で彼らのフーフエを渡さねばならなかつた。三〇年戦争以前には土地と一万六千の農民のフーフエが結合していたといわれている。現在は、この土地には

一六五〇人しかいない。加えて、この過程で、これらのフーフエはほとんどが貧弱な経営のなされている土地保有へと下り下っている。」(ダイテルスによる)

穀物供給の非常な増大につれて、相対的に需要は減少し、いくつかの豊作の時には過剰が生まれ、穀物価格は低落しはじめた。価格の暴落はとどまるところなく続き、価格は国内の市場需要によって形成される限界以下にさえ下がり、次いでようやく再び上昇の動きが始った。

このようにしておこった価格の変動は、次のメクレンブルク官庁統計からとってきた概観によって示される。

ロストツクでは、一〇〇キログラム当りマルクで次のようになる。

期間	小麦価格
1781/85	11.31
1786/90	14.18
1791/95	14.62
1796/1800	17.48
1801/05	23.65
1806/10	19.07
1811/15	14.20
1816/20	29.15
1821/25	9.45
1826/30	13.79
1831/35	13.42
1836/40	16.01
1841/45	16.23
1846/50	18.28
1851/55	20.38

ここにあげた統計からわかることは、恐慌に先立つ

期間の価格に再び到達したのは、通常の発展においては、三〇年代になってはじめてであったこと——つまり、恐慌以前

バルヴス「世界市場と農業恐慌」(二)(大藪・鈴木)

の価格は、国内の生産諸事情によって妥当とされる高さではなくて、明らかに、すでに述べたように、イギリスの市場の好景気によって条件づけられた高さの証明である。恐慌は穀物ばかりでなく、それに応じて地代および土地の誤った価格を一掃することによって——これは価値法則の貫徹と把握す

ることができ——、はじめて資本主義的農業の規則正しい発展の基礎をつくった。

ユンカー的土地所有の繁栄時代が始った。それは、ちょうど前述のイギリス農業の黄金時代と同じように、ほぼ五〇年、したがって六〇年代の終りまで続いた。耕地面積の拡大、新しい栽培品種、耕作の集約化等々。

この説明のために西プロイセン州に関してなされた官庁の研究(一八六七年のプロイセン統計局雑誌)による上掲表のような統計

作付量：ブレージン分農場

1772/73		1863/64	
かぶら	シェップェル	380	シェップェル
小麦	〃	1068	〃
ライ麦	288	835	〃
大えん麦	273	232	〃
えんどう	306	607	〃
えんどう	15	220	〃
かぶらを除く合計	882	2962	シェップェル

の比較がある。

われわれは、同じことを示すだけの他の統計を挙げるのをさし控えよう。いかにして借地料が上昇するかは、すでに別のところで述べた。地価について言えば、メクレンブルクでは一八二五〜二九年の四五、〇〇〇マルク、一八三〇〜三四年の五六、〇〇〇マルクから、一八七五〜七八年の騎士フーフェ一六三、〇〇〇マルクに上昇し、したがって、地価は三倍以上になったことを示している。さきに挙げた今世紀はじめの統計と対比すれば、なお一層大きなものになる。二〇年代の恐慌は地代の虚構の価値をとり去ったが、それは、おわかりと思うが、地代が、他の原因によってなお一層増大することばかりか、それによつてはじめてこの増大が可能になることを排除するものではなかった。

イギリスにおけるのと同じように、ここでも資本主義的地主の繁栄の増大は農業労働者の状態の悪化をともなった。われわれは、メクレンブルクについては、何回も引用したK・F・ダイタテルス(ちなみに、彼はグーツ保有者の敵ではまったくない)の書物において、このような関係の発展の興味ある描写を見出す。

「生活に目を向けてみれば、この期間(イギリスとの穀物貿易の開始および農奴制の廃止から七〇年代の恐慌まで)の始めから終りまでに示されるように、より高い階級の興隆と同じ歩調で、より低いその没落がみられる。……日雇い労働者の事情には、農民農場(Bauernhof)の廃止により変化が生じた。すなわち、以前にはよりよい地位にあった者が労働者になったのである。多くの日雇い労働者は、以前に彼らが血縁の富裕農民の家族の中に見い出していた有利な支えを失なった。……搾乳夫と羊飼いは、たいてい落ちぶれてしまった。……自分の経営に家畜をもっているグーンヘルは、もはや多くの地方でその家畜群に他人の家畜を入れることに耐え得なかった。日雇い労働者は、その羊、時には雌牛さえも、前者については代償なしで後者については搾乳とひきかえにしていた飼養をやめねばならなかった。それらすべては次第にすつと変形され、最近では日雇い労働者は現金で賃金が支払われ得るだけという原則が、しばしば表明され実行されるまでになった。そこで、そのような賃金の最低額をめぐるやりとりが始まった。……」

「まだわずかでも財産をもっているものはすべて搾取され圧迫された。農業労働者は、いままで手に入った現物が手に入らなくなると、それらのものを盗むということになりがちだった。……一八一七年に『無為・違法な営業および乞食によつて、ブルジョア社会にとつてはやっかいものであるか危険である』人々のためにギュストロウ(Custow)に農業労働者の家として一つの大きな建物かたてられたが、その施設は、急速にあふれるようになったので、ブラジルへの流出がうまくいかない時には、このような

施設への収容制限は、次第に強化せねばならなかつた。」

「労働者の状態はみじめなものになった。………より少い収入は多くの欠乏を生み、無力感そしてより大きな困窮をもたらした。この困窮は急速に極大化した。一八二一年には貧民救済法ができたが、それは、それ自体としては、とくに救済の必要な人々の村への所属を決定づけ、村役場の一種の防衛的恐怖心を生み出したのであり、それは今日まで続いている。………当時、村役場の間で、人身売買などとは言えないまでも、四〇年間にわたって共に行動し共に経験したものが信じ理解し得るだけであるような、就業者とその家族の限定された交換がおきた。」

「どんな者も危険を体現しており、その居住地の荷やつかいになつた。………その村の住民が就業し、法的に排除されれば、外から配属されるべき人が流入してきた。………子供、達、他の村に所属している両親を家族としてひきとり得ないときには、家族以外の貧民が配属されることになった。その村は彼をよそで就職させ、その他の人々のところで仕事につかせてもよい。………」

「グーツヘルからみれば、どの村の住民もただ彼が農業労働を生み出し、また生み出すであらう限りにおいて価値がある。この能力とともにその価値はなくなる。それがなくなると、過去の危険に加えて消耗的な損害が加わる。」

「グーツヘルにとって正しい計算は、まず始めにすべての工業労働者を解雇してグーツから（労働力を………訳者）調達することである。………グーツヘルは、これらの人々から何を求めるのか？ 苦悩・危険・出費、それ以上のものではない。なぜなら、たいてい、彼らの弱い作業能力ではその仕事をこなし得ないからである。

バルヴス「世界市場と農業恐慌」(二) (大藪・鈴木)

グーツヘルは彼らを排除し、都市のより有力な親方に依頼する。………」

「農場の日雇い労働者削減の激化は、その利用可能性を減少させ、雇用の危険性を増大させ、グーツヘルをして、さらに計算をすすめて、グーツを定住労働者の負荷から、完全にとは言えないまでも、どれだけ解放するかということを考えさせるようになる。」

しかしながら、ユンカーがそのような計算をし、移動労働者を雇用してみている間に、四分の三世紀の間追いまくられていた日雇い労働者は考えが変わり、自分の荷物をまとめてアメリカへ渡ってしまった！ グーツ所有者は、以前自分から逃がれ得なかつたこの「男たち」がどうして群れをなしてアメリカへ行くのかと、当惑し不安顔にみえていた。ダイテルスは、約一五年間でメクレンブルクでは人口の一〇分の一が出ていったと見積っている。

それは長くは続かず、定住労働者も追い出してしまつていたユンカーは、労働者を土地に緊縛しておくための法律を要求した。こうして、「労働者不足」という「農業の困難」のあの有名な要因が生まれたのだ！

そうするうちに、恐慌の物的な前提条件が成熟し、事態の

一二五 (五七二)

全体的な転回が準備された。

B 幻影的繁栄

影をもたぬ幸福はなし、ということをロツヤのニンカーも経験したに違いない。もちろん、プロイセンにおける半世紀の資本主義的農業の上向的發展にはそれを攪乱するものがあった。それは、とりわけ工業恐慌の余波としておこった。たとえばプロイセンに関しては四〇年代の終りと五〇年代の始めの農業恐慌はそのようなものであった。ニンカーに繁栄をもたらしたところのイギリスも、突然、彼らをこの資本主義的栄光の影の部分に向けさせた。イギリスの工場主の経営がうまくいかなかったために、プロイセンの穀物価格が下がったのである。⁽¹⁾しかしながら、これは急速に克服された。カリフォルニアの金鉱の発見とともに世界市場の新しい発展の時代が始ったのである。工業は急速に発展し、しかもそれはイギリスばかりでなく、それと並んで、第一にフランスおよびドイツで発展した。⁽²⁾こうして、ニンカー達はイギリスの穀物需要の増大、そしてまた、工業の発展の結果としての農産物に対する国内市場需要の急激な増大によって利益をあげた。

われわれはすでに何回も、取引所と資本主義的土地所有との性格の類似性を示してきた。それは、繁栄の時代には、土地投機(Güterspekulation)ならびにその随伴現象であるいかさま抵当(Hypothekenschwindel)にみられる。

土地投機は、まったく尽きることはないさまざまな様相と混成の富を発達させる。その最も純粹な形態は、農場(Güter)を、再びそれを販売するという目的でのみ購買することである。そのような購入者にとっては、農業経営は二次的なものである。彼は、ただ地価が著しく上昇するまで待つて、それから彼の地片を手離して新しいものを購入する。つまり、それは完全に取引所の強気の投機のようなものである。

しかし、土地の売却と購入は、有価証券の取り扱いとまったく同じように、ひんぱんにおこる普通の現象となる。富裕な地主は、農場の取り扱いを馬の取り扱い同様に道楽にする。「土地を買うためにはどんな機会も逃すな!」という原則がうちたてられる。それはまさに、たとえその土地が突然に資本の利子以上の何の利益も生み出さなくなったとしても、その後でもなお地価の上昇によって確実に利益をあげるだろうことを見込んで投機がなされることを示している。また、

そのような事情の下で都市の資本が、土地所有に投下されるために農村へ流入する。

このひんばんな土地移動は抵当権という手段によって容易になる、いや、部分的には初めて可能になる。抵当権は、より少ない支払いで土地を購入する可能性を与える。再びおのずから取引所の仕事との類似性が想起される。抵当権により土地の移動量とその範囲が著しく拡大する。土地所有(地価……訳者の八〇パーセントが貸付けられるとすれば、それと同じ貨幣総額で全額支払う場合よりも五倍の土地を購入できるか、または、さもなければ必要となる貨幣総額の五分の一で土地を手に入れることができる。このような基礎の上に、すでに述べた土地投機と結合して、一種の、土地の差額取引があらわれる。

それでは十分でない！ 抵当権は、土地を手離すことにより新しい土地(もちろん、それも同様に、抵当に入れられる、を手に入れるという目的でのみ設定される。遺産相続の際には、分割に相応した額の抵当権が設定せられ、分割をうけた相続人は自分で払い渡された資本で土地を購入するが、それはすぐさま抵当権をもたらす。さらに、抵当権は、火酒蒸留業・砂

糖加工業等のような農業の兼業を運営するために、また、工業的企業を創設するために、鉄道債・国債およびその種のものに参加するために、また、貨幣を高利で小農民などに貸すために、設定される。最後に、抵当権は、単純に、それが非常にたやすく設定し得るという理由で設定される。したがって、貨幣がうけとられると、人はそれをどこに投資したものとかがしまわる。この形態においては、その操作はまったく幻影となる。それゆえ、それはユニカー達によって少なからずひんばんに行なわれた。

ロート、ベルト、ウスによって報告された、騎士領の所有の変化についての官庁調査は、このような状態を明らかにしている。ロート、ベルト、ウスは、この統計調査の結果を次のように総括している。

「この調査から、プロイセン・ボンメルン(ノイフォアボンメルンを除く)・ポトセン・シュレージエン・マルク・ザクセン・ヴェストファーレンの各州の騎士農場一一、七七一には、一八三五年から一八六四年の三〇年間に二三、六五四の所有権移動があることがわかる。そのうち、相続の事例はたった七、九〇三にすぎず、一四、四〇四が自由な、そして一、三四七が強制売却である。つまり、どのグループも平均して二回所有者をかえた。みられるよ

うに、この所有権移動総数のうち三・四・七パーセントが相続事例で、六〇・二パーセントが自由売却、五・一パーセントが競売である。これらの農場総数のうち、この期間に六七・一パーセントが相続され、一二・三パーセントは自由売却、一一・四パーセントは強制売却がなされた。つまり、平均して、これらの騎士農場の三分の二がこの期間に一度は相続された。これに対して、売却数は騎士農場数よりも著しく大きい。平均して、この期間にすべての騎士農場は一度だけではなく、三分の一は二度売却された。……もし、この一八三五から一八六四年の三〇年間を一年づつ三つに分けてみれば、最初の、一八三五から一八四四年の、一〇年間には、農場の価値が増大し始め、その終りごろには、相対的に最も高くなったのであるが、自由な売却も最も多く、四・九七六であった。次の一〇年間には、その数は四・六九四に減少し、最後の一〇年間には、再び四・七三三に増大する。この間、強制売却の数はたえず減少した。⁽³⁾

ロートベルトウスは、このことについて最後に次のように言っている。「この所有権移動、とくに自由売却の膨大な数は、その非常に多くの部分が土地所有の負っている債務のために使われねばならなかった。」⁽³⁾ 抵当権移動の統計はまた、この報告された所有権移動には主要な補足事項があることも示している。

年次	告示された土地の価値	債務	価値に対する割合
1837	6,895,772ターラー	5,498,284ターラー	80パーセント
1847	10,144,654 "	8,787,280 "	84 "
1857	13,737,029 "	11,076,974 "	80 "

プロイセンの相対的に大きな農場の相当数に関しては、一八三七、一八四七および一八五七年について、その債務がその土地の価値(Bodenwert)とともに官庁で調査された。その全体的な結果は上掲表のようである。⁽⁴⁾

土地の価値は二〇年間で約一〇〇パーセント上昇したが、これは非常に増大していく繁栄のしるしであり、それと同様な歩調を債務もとる。地価の上昇が相対的に最も大きかった一八四七年は、債務も相対的にすなわち土地の価値に対して最も大きかった。この関係は非常につきりしているもので、他の統計がないところでも、抵当債務が増大しているならば、そこには没落のきざしをみるというよりも、むしろかなりの確信をもって地価の上昇、したがって資本主義的農業の上向的動向を結論できる。

ユンカーは、購入した有価証券を抵当に入れて新しいものを購入する、銀行家とまさに同じように行動した。ただ、ユン

カーは、その投機を行なうために、ただの一度も新規の資本を必要としなかった。地価はひとりで上昇し、それにともなつて、絶えずより大きな抵当を手に入れることが可能となつた。

このような、資本主義的農業の躍進と内的に結合している、エンカーの土地所有の幻影の時代は、カー、ハ、フ、ラー、ス (Karl Fraas) 博士により適切かつ愉快に描かれている。注目すべきことに、一八六六年に出た彼の「穀作恐慌 (Ackerbaukrise)」に関する著作は、もちろん、このような發展を過及的、(回顧的) にみており、したがって、その際、彼はこの二〇年代の恐慌を資本主義的農業恐慌の模範だと思つている。しかしながら、二〇年代の穀作恐慌と農業恐慌の関係は、株式の暴落と工業恐慌の関係のようなものである。

「生産恐慌そして終局的には商業恐慌が接近した徴表とまったく相似して、穀作恐慌は、われわれすべてが最近経験した次のような諸現象を通じてあらわれる。すなわち、農場の分割相続などの際の評価におけるのと同様に、土地購入をとつてもない、価格で、すかといふ、冒険を通して。そして、可能な限り、最も高い額で、しかも、高利子での、農業信用の、要求を通じて、貸付人が評価額の大きな分け前を抵当権の対象とすることに軽率に同意することを通じ

パルウス「世界市場と農業恐慌」(二)(大藪・鈴木)

て、農村住民のぜいたく・浪費的所有者によるあらゆる不動産のひんばんな売却の増大を通して、新しい経営部門、とりわけ加工業的な兼業へ、かりたて、られることを通じて。」

K・フ、ラー、スはさらに述べる——われわれは、彼が単に農業の資本主義的躍進の徴表をそれに伴う幻影とともに指摘しているのにすぎないにもかかわらず、彼が農業恐慌の一般的諸条件を描き出していると確信していることを再び思い出す。

「農場価格のとつともない上昇……非常に安定した時代で、穀物を非常に妥当な価格で購入する工業が力強く花開く場合に、地代は上昇し、それにつれて、その上昇の諸結果があらわれる。」

「荒れた農村地域は、一体、役畜・肥料・機具などに必要な経営資本が存在するのかわりもまったく考慮されずに開墾され、容易かつよく売れる生産物、すなわち、まず始めに穀物の耕作がなされる。」

「この時には、指導・報酬・耕作委託およびそれに類するものも荒地の耕作を刺激するには何も役立たないか、ほんのわずしか成果があがらなかったが、いまや、それは驚くほど性急に進展している。今は大地主でさえも共有地の分割を喜び、小地主はそれをまさに自分の生存条件と考える。」

「このような新開地では湿地と沼の排水は放棄され、一方、乾いた土地では経営資本と穀物生産の持続を考慮することなしに開墾される。」

「土地の価格は、人口が稠密で工業が高度に発達して、いる地域からはじまって、逆のことがおきているどのような国にも向かって波のように移動する。たとえ、その農地が、非常に豊沃で、気候が非常に良いとしても。政治的諸現象ないし交通の攪乱がない限り、このような波動はヨーロッパでは西から東へかなり規則的に進むが、ただ、どの波も遠くにおし進むにしがたって次第に小さくなり、最後には南ロシアとシベリアのステップ地帯の鏡のようにならめらかな放牧経営の海へ流れ去る。」

「まさに、それにつれて、土地の価格は低下する。なぜなら、あらゆる生産が活気があり、資本は利子が低く、労働はあらゆる技術的援助により巨大な生産能力をもつような傾向があるところでは、地価は最も高くなるからである。そして、工業において、大きく、かつ、資本でさえも、そのふ化場を失い、安全な休息場を『父租の地』すなわち土地に求めるといふことは、まったく特記すべきことである。」

「いまや、われわれは産業家・工場主・銀行家、自身そして投機家が土地購入をはじめ、のをみる。そして、彼らは予想されるはずのわずかな利子(というものは、地価が高いので)にまったく欺かれることなく、それどころか農業はばか者がやることだとあざ笑っているのであるが、それでも彼らはより大量の不動産を手に入れる——それは安全性のため(ないしは増大する地代から利益を得るため)である。」

「それは、上品な趣味と芸術が経営農場(Wirtschaftshof)にぎえ入ってくる時代である。ローマの別宅・ギリシャの森・アラブ

のバラの園・公園と滝と芝生さえついた別荘、これらが狩猟地とらうそうとした森をもつ古風な地主の城にとつてかわる。それに続いてまた、農業の発達は、費用のかかる機械・血統の良い家畜・目的にあわせた経営建物、そして最後には輝かしい農業図書館も設立されるが、それらはすべて、工業の利子・株式会社の配当・インド公債(Indianstocks)つきであり、古風で経験にもとづく農業は驚きながら首を横に振り、これらの不可能なことから頭をそむける。ところで、新しい『地主』は、ユンカーの生活態度と結びついたり、封建時代におけるような傍若無人さで一片の城内生活をおくるといった邪悪なたのしみはもっていない。」

「古い快樂からも、しばしば、今なお『強化されている』土地所有が生まれ、農場が購入され、細分化されて再び売却される……そして、もし平和がさらに続き、公債はその利子を、株式はその配当を生むならば、自由な土地の移動、そして工業のこころよい快樂はいっそう増大し、恐慌がくるまで続く。」

つけ加えて言うならば、単に「新しい地主」だけが投機をするのではなく、「古風で経験にもとづく農場主」も抵当に入れて得た貨幣で「インド公債」を買い、醸造業をはじめ、土地を扱ってもらうのである。

ユンカーの光榮に対する、かのピンダール(古代ギリシャの叙情詩人……訳者)のような欲望に逆って、K・フラー、博士は、小経営に対する土地所有の機能について次のような意見

を述べる。

「だれが私の自由を攻撃するのか？ 資本の豊かな大地主は小地主に言う。『君のギイギイ音がする犁に新しいわん曲した撥土板をつけたら、雄牛を追い払って雌牛に二重くびきのかわりに額あてをとりつけても、とくに雄牛が馬をフーフニから追い払ってしまっているんだから、むだなことだよ。私は、蒸気機関車と蒸気発動機ですいたり運搬したり打穀したりしているし、それで香料やもやし汁を煮つめたり、君がキシキシ音がするワラ切り台で何日もかけてするのと同じだけ多くの飼料をわずかな時間で切るのだよ。たとえ、君が古い火酒蒸留器をみがき、その円蓋を掃除し、灰色のジャガイモ澱粉を小さな桶に用意し、手製チーズを板にして貯蔵し、息が切れるまでバターをつくったとしても、君は私の蒸気醸造機つきの蒸留機具・機械によるれんが製造・機械けん引力や澱粉工場・人工肥料投下と草地栽培・チーズ製造と蒸留カスを飼料にする酪農などにはもう追いつけないね。君の『小屋』や『バラック』や『火酒製造所』を売ってしまいなさい。そうして、君の労働力を都市か、または私のところにふりむけた方がいいですね。でなければ、オーストラリアでも蚊のところで胡椒のところでも——要するに、どこか今の君の仕事よりもよいと思つたところならどこでもいいですよ。』」

もちろん、今日ではユニカーはまったく別の調子の声をあげている。かつては、問題となるのは、「繕つたワラぶき屋根」であり農民である、いや農民だけなのである！ 今日

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

では、ユニカーは、「小屋」と「バラック」と「火酒製造所」を保持すること以上に、何ら心配はいらないと申し立てる！ つまり、ユニカーが、献金や関税や奨励金のことを顧慮することなく自由にながままが言えた時代のことを思い出せば十分である。

業種	1826年から1850年まで (25年間)		1851年から1870年(前 半)まで(19年間)	
	企業数	資本 百万マルク	企業数	資本 百万マルク
株式会社全体	102	638.0	295	2,405.0
うち銀行	3	18.6	20	94.6

六〇年代の農業恐慌は、K・フラウス博士の意見のように

単に投機の産物ではなくて、すでに当時
ロートベルトウスが認識していたように、
全般的な金融不況(Finanzstockung)の結果
であつた。(5)それは、「抵当不足(Hypotheken-
mnoh)」、つまり、抵当権を設定するのが困
難になることであり、それに付随して、抵
当権者は、彼の資本のよりよい投資先を見
つけたので、資本を回収したという現象が
みられる。信用利子の高騰ないしは「信用
不足(Kreditnoth)」がおこつた。

この金融不況の原因は、単に大量の、メ
リカ公債だけでは決してなかつた。むしろ、
当時すでにドイツはあの温室的な工業発展

の時期のただ中にあり、それが後に独仏戦争とドイツの統一を条件づけ、六〇年代の大規模な投機の中で資本主義にふさわしい結末を見出したのである。

プロイセンにおける株式会社の設定は前頁表のようであった。

五〇年代以降にいかに急速に創立活動が開されたかわかる。しかしながら、この概観が示すように、迅速に躍進する産業活動が要求する大量の資本に対して、銀行組織はほんの中庸の発展しかしてはいないのであった。したがって利子歩合は上昇した。プロイセン銀行の割引率は一八四七から一八五五年(一八五五年を含む)まで四から四・三パーセント、一八五六年には四・九パーセント、一八五七年には五・六パーセント⁽⁶⁾、そして一八五八から一八六二年には再び四・二から四・三パーセント、しかし一八六三年には五パーセント、一八六四年には五・三パーセント、一八六五年には四・九パーセント、一八六六年には六・二パーセント(！)である。同様にしてプロイセン銀行の配当率も、一八六四、一八六五、一八六六年の間に、一〇・一から一〇・九パーセント(！)という法外な高さに到達した。

このことがどのような結果をもたらしたかについては、ロ、ト、ベルト、ウスを参照すべきである。抵当権者は資本を回収した。利子歩合が上がったので地価は下がった。抵当権はその安全性を失った。新しい抵当権はわずかな額で、かつ非常に上り上げられた利子でのみ貨幣を調達した。こうして、数多くの強制競売がはじまった。

それは一時的なものであった。すでに一八六七年には利子歩合はひとりで下がった。信用組織は急速に発達した。そして、フランスの貨幣の洪水がおこった。銀行は雨後のきのこのように増大した。すぐに銀行の過剰がおきた。一八七〇年後半から一八七四年までに一〇三の新しい株式銀行が八億三、八〇〇万マルクの資本で設立された。新しく創設された資本全体に対する新しい銀行資本の比は、一八二六〜五〇年には一対三四、一八五一〜七〇年には一対二五、これに対し一八七〇〜七四年には一対四であった。新しく設立された銀行のうち一八七四年までにすでに一億七、六〇〇万マルクの資本をもつ二九の銀行が倒産したとしても何の不思議でもない。

工業の急速な発展の下で穀物価格および地価が上昇した。

ユンカーは心から喜んで（土地を……訳者）抵当に入れて貨幣を調達した。しかも、その喜びは大きなものであった！

六〇年代にはユンカー的土地所有の債務は巨額になったに違いない。残念ながら、ドイツにおける債務の統計はきわめて信頼性がうすく、この

年次	イングランド	フランス	プロイセン	イングランドとプロイセンの差
1816—1820	364.0	265.0	206.2	-157.8
1821—1830	266.0	192.4	121.4	-144.6
1831—1840	254.0	199.2	138.4	-115.6
1841—1850	240.0	206.6	167.8	-72.2
1851—1860	250.0	231.4	211.4	-38.6
1861—1870	248.0	224.6	204.6	-43.4
1871—1875	246.4	248.8	235.2	-11.2
1876—1880	206.8	229.4	211.2	+4.4
1880—1889	169.2	197.7	190.5	+21.3

期間については何の比較もできない。

六〇年代の大工業恐慌がおこった時には、ドイツはすでにできあがった工業国として存在しており、高い地代・高い地価・多額の抵当債務・高い穀物価格、そして資本主義的に計算された高い穀物生産費をもっていた。上掲表の小麦価格の総括はこの変化が完遂されたことを示すが、それは

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

また一層の発展を明らかにする。

一〇〇キログラム当りマルクで小麦価格は上掲表のようになる。

この世紀の始めには穀物に対するイギリスの需要が支配的であったため、農業的な大陸と工業的なイギリスとの間には最も大きな価格差が示される。その際フランスの価格はプロイセンと同じくらいの高さである。そして二〇年代の破滅がやってくる。価格は非常に下落するが、イギリスとプロイセンとの価格差はほとんど縮小せず、これは、それが高い運輸および商業コストによって吸収されていることの証明である。その後には大陸における資本主義的な農業および工業の発展の時代がはじまり、それは規則的にこれら三つの国における穀物価格の平準化をもたらした。特徴的なことは、みられるように、イギリスにおける穀物関税のつり上げは、比較的長期間にわたってイギリスの小麦価格の低下を全くもたさず、逆に大陸の小麦価格の上昇をもたらした。この三つの国のお互いの穀物価格の接近は、その大部分がまったく、フランスとドイツにおいて工業の発展とともに穀物価格が上昇することによってもたらされた。一八七一一七五年のヨーロッパ工

一三三 (五七九)

業の偉大なる繁栄の期間にこの平準化は完成される。工業恐慌とともに小麦価格もまた三つのすべての国において下落するが、それは、ここでは穀物価格の一般的な運動を示すのにすぎない。一八八〇〜八九年は保護関税の時代である。イングラントはもはや何の穀物関税も持っていないので、今度はプロイセンとフランスよりも著しく低い穀物価格を示す。

高い地代とわずかな賃金。高い地価と大きな債務。高い穀物価格と高い「生産費」。低い賃金は「労働者不足」を生み出し、大きな債務は過度の利子負担を条件づけ、高い「生産費」は世界市場での競争力を失わせる。繁栄の条件は「農業の困難」の前提条件となる。

十 ロシアとアメリカの競争、経済不況

「農業の困難」

歴史的にはヨーロッパに属し、ドイツに続いて同じように「農業国」から「工業国」への発展をなした国は、ロシアであった。ロシアもまたロシアに歴史的に課せられた使命をなしとげることに着手した。クリミア戦争は、必要な変更を加えれば、ナポレオン戦争がドイツに対してもっているのと

同様な意義をロシアに対してもっているのだが、そのクリミア戦争の後に農民解放（一八六一）がおこった。それから、ロシアの小麦輸出も一八五一〜六〇年の一〇年間の七三〇万ヘクトリットルから一八六一〜七〇年の一〇年間の一、三三〇万ヘクトリットルへと増大した。

ロシアを資本主義的世界生産の相互作用の中にひき入れるための前提条件は、まったく世界市場にあった。そして、この機会を完全に利用しつくすために、ロシアは鉄道を建設し、港を敷設し、最後にその輸入関税を下げた。

期待すべき効果も生じうるかにみえた。なるほど、まずはじめには一八六一年の後にドイツの二〇年代の恐慌と相似した経済不況がおきた。しかしながら、その後一八六三年にはすでに底に達し、とくに原料・半製品・機械の輸入にあらわされるような、急速な上向の変動がはじまったが、それはロシアの工業の萌芽が形成されたことの一つの徴表である。

現実には世界市場との関係をまったく違うように形成してしまふような、そしてさらに以下で述べるような事実がおこらなかつたとすれば、その後の発展がいかにして展開されたかを確言するのは難しいことではない。ロシアの穀物輸出がま

すまず拡大していくのなら、それにつれてその工業の市場および自国の工業も拡大したであろう。それに条件づけられて、穀物価格・地代・地価・「生産費」の上向的な動きもおこったであろう。いずれ将来にヨーロッパの穀物価格に平準化されるまで、どこでも、穀物市場における競争の強度は、絶えず減少したはずであり、実際においてはそうであつたように、絶えず増大することはなかつたであろう。ほぼ六〇年代の工業恐慌の期間には景気は底に達し、その後には穀物価格はもはや、下がることなく上昇したであろう。実際には、穀物価格は六〇年代の終りまで持続的に下落した。これはまさに今日の「農業の困難」の徴表である。

つまり、農業恐慌はヨーロッパ、とくにドイツにおいては避けられなかつたであろう。しかしながら、それは、ちょうどナポレオン戦争後および穀物関税廃止後のイギリスの農業恐慌のように、出現しては消滅していったであろう。そうするうちに地価の縮少は、再び次第に上昇する穀物価格という基礎の上で、改良された生産技術の応用を伴って、資本主義的農業の新しい繁栄の時代を開始させたであろう。

しかし、それらすべてはまったく異なるものとなつた。そし

バルヴス「世界市場と農業恐慌」(二) (大藪・鈴木)

供給国	1846—50	1851—55	1856—60	1861—65	1866—70	1871—75	1876—80	1881—85
ロシア	19.7	16.9	19.8	20.1	33.0	27.1	14.9	15.0
合衆国	6.2	11.6	18.8	32.1	22.8	40.9	54.0	48.8
ドイツ	31.7	29.2	23.5	23.2	18.2	8.2	6.9	3.4
フランス	9.3	5.5	11.6	3.4	3.1	2.7	0.7	0.01
その他の	33.1	26.8	26.3	21.2	22.9	21.1	23.5	32.8

てそれが変わったのは、とりわけ北アメリカの合衆国のせいである。まさにヨーロッパの歴史が見事に諸関係を調整したその時に、企業的なアメリカ人が仕事熱心に割り込んできて、個々の国の歴史的既得権を無視してあらゆる方面に足を踏み入れ、自分の楽しみに従って諸関係を混乱させた。

合衆国の栽培面積は急速に増大した。だが、それとともに、アメリカの小麦輸出は、はるかに急速に拡大した。

アメリカの小麦輸出はまず第一にイギリスに向けられ、次にフランスへ、それからベルギーとドイツに向けられ、ドイツは最近の一八六八年にはじめて四、〇〇〇ブッシェルのアメリカ小麦を輸入した。こうして

ヨーロッパの穀物市場における競争戦がどのように展開したかを、ゼーリングによって計算された、イギリスへの穀物供給においてそれぞれの国の占める比率が示してくれる(前頁表)。

一八六一年まではドイツがイギリスの穀物市場を支配しており、フランスからの小麦輸入も無視はできない。一八六一から一八六五(一八六六から一八七〇……訳者)年にはロシアがトップにたつが、残念ながらこの歓喜は完全なものとはいえない。なぜなら、すでに合衆国が踵を接して続いているからである。一八七一年からはアメリカが強引に出しゃばってきてロシアを完全に追いやり、他の国が未だ到達しなかったような地位を得る。ただ、上述の最近の期間にはすでに、東インドとオーストラリアという競争相手が成長してくる結果、後退を示している。

それにもかかわらず重要なことは、世界市場において一方の国が他方の国により、すなわちロシアが合衆国により交替せられることでは全くない。世界市場の発展のはじまり、とりわけヨーロッパ農業の状態を理解するためには、次のことを考慮に入れなくてはならない。すなわち、資本主義的植民地領域としてのアメリカの性格・アメリカと本国との間の相

互作用、アメリカ穀物の輸入がわり込むことによるヨーロッパ諸国の相互の貿易関係の変移、また同様に、これがヨーロッパ工業の発展に対してもった作用、である。アメリカの競争もロシアの競争も、またその両方をあわせても、現在の「農業の困難」を説明するには十分でなく、むしろ、それは資本主義的世界生産を形成する一部分として把握せねばならず、その全体の運動の中のみ問題の解明が存在している。上述の理論的説明に従って、一般にアメリカ農業の優位は何にもとづいているかということがまずはじめに証明される必要はない。最も学識あるドイツ人のアメリカ農業研究者であるマックス・ゼーリングの成果に、さらにわれわれの説明をつけ加えれば十分である。彼はその一般的な考察で次のように結論している。

「北アメリカの農業生産が西部および中部ヨーロッパのそれよりも多くを享受している唯一の国民経済的な利点は、結局、低い地価にあるということになる。他のあらゆる生産の要因、すなわち、労賃・通常の利子歩合および種々の流動資本の価格を考へてみると、逆に、ドイツ・イギリス・フランスの農場主は海のかなたの同業者よりも恵まれた地位にある。アメリカの競争力は、その国民経済的基礎を少ない人口(Dünne Besiedlung)とそれに条件づけられた低い地価にもつてゐる。」

もちろん、低い地価は、夏の暑さが温度計の水銀柱の長さによって決まるのとはほぼ同じように、「少ない人口」によって決められる。ゼーリングの書物自身にそれを証明するのに十分な事実がふくまれている。われわれが知っているように、この現象の一般的な原因は工業と農業との関係にあるのであり、もちろん、そのうちでは農業人口に対する工業人口の關係ではなくて、非農業の需要ないしは穀物の市場需要に対する穀物生産の關係が理解されるべきである。工業が相対的に大きく発展しているところでは、この市場需要は大きく、そして穀物価格も土地価格も同様により高く、人口もまたより狭い土地空間に集中する。それは合衆国についてもあてはまる。

合衆国のヨーロッパとの差異（それは同時に資本主義的植民地としての合衆国の特徴である）は、いまや、工業と農業の間の關係の發展に継続性が少ないことである。つまり、合衆国ではこの發展が、新しい土地を占有し耕作面積を拡大する入植者の流れによって絶えず中断されている。かくして、絶えず新たに穀物価格を上昇させなくするような穀物生産の過剰が生じる。ヨーロッパでは耕作面積の擴張は地代の増大を条件づけ

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(一) (大藪・鈴木)

る。地価がじゃまをしない合衆国では、逆に、耕作面積の擴張は地代の増大を阻止するものとしてはたらく。

ゼーリングが正しくとりあげているように、入植とともに国内移住も考慮されるべきである。しかしながら、これは植民地發展の異った段階には異った原因をもっている。すでにわれわれが話を始めた時期には、国内移住は穀物輸出、としてのアメリカの性格によって条件づけられていた。安い穀物を輸出するために古い居住地は、そこで穀物生産が利益をもたらさなくなるや否や放棄されて、新しい土地が占有され、他方、自分の仕事に失敗したものはすぐに商売をかえて植民した。ゼーリングによれば、六〇年代の恐慌はこの方向に強力な作用をした。

かくして、アメリカは、農業について言えばプロイセンやロシアのように、限られた人口をもった限られた国としてあるのではなくて、その發展は、農業地域が工業的に發展する一方で、すでにそうするうちに新しい農業地帯が形成され、続いて第三のものが形成されるというように展開した。それは、あたかも、農業国の全複合体が次々に世界市場に結合していくようなものである。しかしながら、このような發展は

合衆国という政治的境界と何ら結びついているものではなく、まさに農業を經營する資本主義的植民地の形成を示すものであることは明白である。確かに、最近の發展は、いかにひんばんにこのようなことがおこったかを、世界市場でのアルゼンチンの出現において示した。

一見して、農業を經營する資本主義的植民地の發展は二つの要素、すなわち移住と、恵まれた氣候条件にある豊沃で占有されていない土地の存在、にのみ依存しているかにみえる。しかしながら、よりくわしく考察してみれば、そのもう一つの条件は有利な穀物販売の可能性であることが示される。世界市場との関連なしに荒地に送られる人的移民地は、決して資本主義的植民地ではない。その関連は、穀物生産植民地に關しては穀物販売によって形成される。いまや、事情によっては穀物の過剰生産がおこり、穀物価格が農業を不利にするような水準に到達すると、このような植民地では明らかに恐慌がおこり、同時に入植は別の目的でなされるようになる。したがって、再び、植民地が、世界市場自身を条件づけながら、世界市場によって条件づけられるという相互作用がみられる。

アメリカが資本主義的植民地として穀物市場ではたしている独自の役割を特徴づけたので、われわれはさらに、アメリカへの移住がいかにして展開されたかを数量的に考察しよう。アメリカへの移住は、一八二〇から一八九四年までに一、七〇〇万人にのぼった。ただ、ここでとりあげた期間のうち一八六一年以後に一、二三〇万人が合衆国へ移住している。こうみると、先に述べた耕作面積の拡大・相対的な穀物生産の増大そしてアメリカの穀物輸出の急激な増加に関する資料はもはや何ら不可解なことではない。人は、アメリカの穀物競争は、ヨーロッパの資本の当然の産物だということを見る。

世界市場に対するアメリカの小麦輸出の圧力は、とりわけ、ロシアの小麦輸出を阻害する条件となった。しかしながら、小麦市場での競争条件が悪化したので、ロシアは今までより一層ライ麦輸出の方に移行した。それによりロシアの輸出の方向は変わり、ドイツの穀物市場に非常に大きな圧力を及ぼした。

ロシアがその穀物をアメリカの価格で販売することを強制されるといふ状態は、非常に大きな意味をもっていた。それにより、何回も述べた地代の上昇およびその地価への固定化

という過程は、その展開が阻止された。それゆえ、資本主義的グーツ経営のかわりに、小借地農の擲出によって特徴づけられるアイルランドのような状態が形成された。農民が賃金労働者になるかわりに、農民に自分の土地を法外な価格で貸し付ける投機的グーツ所有者があらわれた。地主自身が農民共同体(Bauerngemeind)と結びついていないところでは、中間借地人(Zwischerpächter)がその仕事をした。貴族の地主の一部もまた没落した。そのかわりに、商人と高利貸の二つの顔をもった小都市の資本家があらわれて、さらに大きな氣勢をあげながら、貸付地による収奪の体系を運営した。こうして、アメリカと競争する可能性が生まれて、またロシアの側から穀物市場に強力な圧力が加えられた。このロシアの穀物輸出全体は、齒に衣をきせずと言え、国民の虐待に、農民大衆の恐るべき飢饉に、際限のない土地のはく奪と略奪に基づいていた。このような発展の結末が、一八九二および一八九三年の破局であった。

こうした事態のもう一つの結果は、ロシアの工業発展の遅滞であった。

ロシアの外国からの輸入は、二〇年代の終りから急激に減

バルヴス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

少してきた。それは、一八七六〜八〇年の五年間には二四億一、四〇〇万銀ルーブルであったが、一八八六〜九六年にはたった一七億八、三〇〇万(！)である。ドイツからの輸入は一八七二〜七五年には九億三〇〇万銀ルーブル、一八七六〜八〇年には一一億五、〇〇〇万、そして一八八六〜九〇年には六億八〇〇万ルーブルとなった。⁽²⁾

穀物価格の低落——「農業の困難」の開始——は六〇代の商業恐慌とともに始った。この急性の恐慌の経過は一八七九年にはかなりおさまったが、それでも期待すべき繁栄の時代はいっこうに始らなかった。それがおこるためには、もちろん、火酒とプロイセンの将校を送りこむことだけしかできない。アフリカの植民地を建設することでは十分でなかった。それには、織維製品・機械および文化的需要品目に対する大きな販売領域が開かれることが必要であった。もし、ロシアの資本主義的發展が六〇年代に示されたのと同様にさらに持続したとすれば、それによって同じような巨大な範囲の市場が創造されたことであろう。そして、ロシアと並んでハンガリー・ガルスニア・ドナウ諸侯国が考察される。しかし、アメリカの競争によって、ないしは資本主義的植民地形成の発展に

よって、これらの大部分のヨーロッパの農業および工業の資本主義的發展は阻害された。確かに、アメリカは重要かつ増大する工産物市場をもっていたが、この巨大なヨーロッパの販売領域のどれにもとってかわることはできなかった。そして、その際、アメリカ工業の發展のヨーロッパ市場に対する反作用は、すでに説明したように、耕作面積が常に新しく絶え間なく拡大することによって発現した。アメリカの経済的繁栄のいかなる拡大も、ヨーロッパのアメリカへの移民の増

国	1883年	1887	1892	1883年と 1892年の差
ドイツ	326.8	313.0	349.6	+6.0%
フランス	330.2	291.0	305.9	-7.0%
イギリス	731.3	643.4	715.4	-2.0%
計	1388.3	1247.4	1370.9	-1.3%

大によって導かれた。アメリカへ工業製品を送るのの蒸気船も、別のもの、すなわち農民と労働者を運んだ。

かくして、遅々とした工業發展というかの状態が生まれてくるのであり、それは経済不況として特徴づけられ、すでに一五年以上続いている。一般に知られているこのような事情を説明するため、次のような比較だけをあげておく。

外国貿易総額は、百万ポンド・スター

リングで上掲表のようであった。

この表は、これらの主要な工業国の貿易の停滞をはっきりと示している。

工業の停滞は、ひとたびおこると、穀物市場に影響を及ぼすが、最初は穀物の流入を増大しさえする。主農派は喜びすぎて、穀物価格の低落が商業恐慌の結果としておこったこと、穀物価格は、巨大かつ急速に増大するアメリカおよびロシアからの流入にもかかわらず、工業の躍進が続く限り上昇するということを忘れる。いまや明らかに、工業の不況が穀物価格を低落させると、アメリカの農場経営者はロシアの農民と同様に、通常の貨幣取引を穀物の販売から得るためには、より多くの輸出向け穀物を売らねばならない。一八七七年は一八七九年より三〇パーセントだけ小麦価格が高かった。したがってまた、一八六六年には小麦生産の二五パーセントしかヨーロッパへ輸送しなかったアメリカの農場経営者も、一八七九年にはヨーロッパへ全体で四〇パーセントを供給した！どの農場経営者も平均的にこのように行動し、同時に耕作面積を拡大したので、アメリカの小麦輸出はちょうど一〇〇パーセントだけ増大した！これは、一八七八および一八七九

年のアメリカ穀物流入の突然の増大を説明するものであり、その直接の結果がヨーロッパ大陸における穀物関税の導入であった。⁽³⁾

穀物関税自体が穀物市場に対する圧力を増大させるもう一つの要因としてあらわれた。この圧力が有効であればあるほど、国内農業に対して穀物関税は有効でなくなる。つまり、実際に関税によって穀物の流入を著しく後退させたとしても、それによって工業物輸出したがって国内工業の発展は阻害され、その結果、再び穀物価格に対する圧力がはたらく。アメリカとロシアが穀物をより少くしか輸出しなければいけないほど、それだけ工業製品を少ししか輸入できなくなる。ドイツが一八八五年に高い穀物関税を設定した時、なるほど一八八六年の穀物輸入は一八八四年に対して二億一、三〇〇万マルクだけ減少したが、同時に商品輸出も二億一、九〇〇万マルク減少し、それと関連して、穀物輸入の減少を差し引いて、全体的な商品輸入にさらに一億五、九〇〇万マルクだけ(！)減少した。一八八七年の関税引き上げは同じような作用をしなかったとしても、それはただ穀物輸入がめだつたほど減少せず、三、五〇〇万マルク足らずであったからにすぎない。

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

この期間に国内市場が相対的に大きな意義をもっていたということは、世界市場の特微的な情勢に規定されていたのである。鉄道網が活発に拡張され、大都市が成長した。鉄道の長さはドイツでは一八七五年の終りに二七、八九一キロメートルで、一八九二―九三年には四二、九〇八キロメートルになった。一〇万人以上の住民のいる都市は、一八七五年には人口の六・二パーセントを、これに対して一八九〇年には一二・一パーセントを容していた。これに相応して、工業および農業生産物についての都市の消費も増大した。たとえばブライメンでは統計的な計算がなされているが、ライ麦および小麦の粉ないしパンの消費は、一八七二―七六年の年平均が一〇五、五八九メートルツェントナー、これに対して一八八七―八八年は一三二、四八二メートルツェントナーで二五パーセント増大した。⁽⁴⁾

しかしながら、ある程度まではあたかも独自で進展しうるかにみえる都市の発展も、最後には工業したがって世界市場の発展にその限界をもつ。都市が単なる貨幣蓄積と消費の中心地となればなるほど、それはそれだけ一層純粹なる寄生的存在に向かつていく。そうして、その人口は年金生活者とそ

一四一 (五八七)

の類、ルンペン、プロレタリアから構成される。都市は最も富裕な別荘地域とならんで最も完全な犯罪者名簿をもつ。それは多くのまやかしもの避難所となる。そして、その成長は繁栄のしるしではなく、むしろ停滞のしるしとなる。

国内の穀物市場を守るための努力は、このような事情の下では、まったく国内市場の保護という形態にしばしばなりがちである。

これらは、最近のヨーロッパの貿易政策の一般的諸関連である。工業の発展は、少くとも穀物価格の低落を阻止するほど十分には急速に進まなかつたので、穀物関税が導入されたのだが、それにより工業の発展が、はじめて阻止されたのである。次いで国内市場にバリエートををはるのだが、それにより世界市場、したがって工業の発展がとめられたのである。

「ヨーロッパの保護関税にヨーロッパの資本主義的生産の關係が表現され、したがってまた工業と農業との關係が表現されるのだが、これらすべては、資本主義的生産の性格に照応して、対立と矛盾として表現される。」⁽⁵⁾

経済的不況は、資本主義的諸矛盾のゆっくりとした展開を条件づけた。この点では移民もまた非常に大きな作用を及ぼ

した。人はただ、一世代の間に移民した一、二〇〇万人が農村にとどまっていたとしたら一体何がおこっているだろうか、と考える。それは、さもなければすでに分割されている農民的所有のどんなにかひどい分割を意味し、どんなに大量のプロレタリア化を意味することであろうか！これが、農民階層の一時的な「維持」の真の原因である。

他方、ヨーロッパの移民は単にアメリカの農民を生み出し、それによってアメリカの穀物競争力を生み出したばかりでなく、アメリカの工業をも生み出した。一八八〇年のアメリカの統計によれば、ドイツからの移住者のうち二九三、七二二人が農業に従事したが、七三九、四六八人は他の生産部門に従事し、しかも、手工業および家内奉公に二一八、八六七人、商業および運輸業に一五二、四九一人、鉱山業および製造業に三六八、一一〇人であった。これは、その後なおいつそう農業には不利な方に変移したに違いない。そして、合衆国の工業国への発展は、すでにヨーロッパにとっては、中央アメリカ・南アメリカ・東インドおよび東アジアの市場でかなり目につくようになっていた。しかし、これはすでに世界市場の新しい発展の付属物に属するものである。

経済不況と「農業の困難」は密接に関連している。両者は相互に条件づけあう。工産物の輸出はゆっくりと展開する。工業の活動は、主として国内需要品目に向けられる。国内流通は、商用旅行者・運送業者などによって非常に発展する。商品信用は最も危険な形態をとる。貨幣資本は急激に増大する。株式取引所は持続的に拡大する。利子歩合は低落する。合理的な大農業経営は阻害される。これに対して、農業の工業的兼業経営は法外に発展する。農民層は貧困化するが、それでも土地にとどまる。農民の家族が減少するので、農民の分割地はよりわずかしか分散しない。そのような中でも、農民の自然経済から商品生産への転換は拡がっていく。グーツ所有者にとっても抵当権はもうけにならない負担となる。にもかかわらず、相対的にはめったに競売にはならない。グーツ所有者は利子を工面しようと苦勞する。なぜなら、彼は競売によって何の剰余も残らなくなることをおそれ、他方、抵当権者は売却することによって資本を失うことをおそれるからである。労賃は下がりはいないが、たまに上がっても全くとるに足りないほどである。家内工業は、都市におけるのと同様に農村においても発展する。

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(二) (大藪・鈴木)

どこにこのような状態からのぬけ道があるのか、という疑問がわいてくる。その答えは、自生的に形成される世界市場の結合にある。つまり、それは一片の思弁的な言葉の中にはあり得ず、推測し得る資本主義の世界生産のいっその発展を描くことによって与えられねばならない。すでに、この新しい諸関係も、それを特徴づけるのに十分なほど成熟して入る。

「農業の困難」に関しては、いつでも次のことが明らかである。すなわち、農業恐慌の究極的かつ独自の原因は、ただ一つ、資本主義の発展によって高くつり上げられた地代ないし、地価である。この地価をとり除けば、ヨーロッパの農業は再びロシアおよびアメリカの農業と競争し得る。この地価をとり除けば、再び土地の質の生産上の差異が有効になり、それによっていかなる場合でも、現在では全く差異のない、それぞれの種類の土地に対する恐慌の作用がとり除かれる。したがって、せいぜい最劣等地が耕作から引きあげられ、残り競争力をもったままであるということになる。

ここからすでに、アメリカ農業の競争をヨーロッパの自然的災厄として説明することは非常に愚かしいことだと言え

る。この競争は全く資本主義的現象である。土地に対する私的所有が社会的なものに変化すれば、もはやどんな地価も存在せず、したがって、アメリカの穀物競争力の破壊的作用も停止する。それは、移民が停止すれば、すでに著しく減少する。そして移民は、労働者が農村で賃仕事を見つけさえすれば、停止する。このようなことが生じないのは、本質的には、生産一般に問題があるのではなく、資本主義的な生産に問題があるのである。

私的所有に基づく資本主義社会は、私的所有者を没落させ、排除することにより、ないしは他のものとおきかえることによつてのみ、その欠陥をとり除くことができる。私的所有者は破滅させられねばならず、それによつて私的所有は救われる。したがって、世界市場が万一方まく形成されることを別とすれば、農業恐慌に対抗する唯一の手段は、資本主義的土地所有全体を競売にかけることである。そうすれば、地価は新しい条件に相応した高さに下がり、ヨーロッパの農業は競争力をもつようになるだろう。穀物に関税をかけるかわりに、むしろ、それにみあった率だけの地価を下げねばならないだろう。未だ保護関税によつてどのような恐慌も排除されてお

らず、資本主義的害悪に対する資本主義的手段は自由競争だけであり、それは、交換価値を新しい世界市場関係によつて与えられた水準に縮小させ、同時に、貿易と生産を拡大する。もちろん、それはその時々地主の利益および抵当権所有者の利害と対立する。しかし、それは彼らの利害とだけであり、決して資本主義的生産（それが工業においてであれ農業においてであれ）のそれとではない。

抵当権は地価の反映である。抵当権を国有化したとしても、それによつて抵当権所有者に安全性を与えるだけであり、地主には利益にならない。というのは、抵当権の負担は利子歩合にあるのではなく、高い地価の結果である高い債務総額にあるからである。

抵当権の償還も一つの幻想である。地主が身分相応の収入以外に、抵当債務を返済するために、なお多くの余分をもつていたとすれば、彼は抵当権を何ら負担とは感せず、したがって、なおいっそう新しい抵当権を設定するだろう。

もし現在の価格で土地を購入することによつて国有化しようとするなら、それによつてグーツ所有者には高い地代、抵当権所有者にはその資本を救い、国家が全負担を負うことに

なる。それは、労賃の切り下げと地価の上昇によって形成された高い地代が永久化するのを意図していることをあらわすであろう。もちろん、資本主義的国家は、資本主義的地主と同じように、このようなことを世界市場の発展に対抗してはできないだろう。したがってそれは、農場主としても地主としても破壊されるであろう。

世界市場の状態にも抵当権を伴う高い地価にも何の変化もない限り、明らかに「小さな手段」、すなわち灌漑・機械・信用機関・協同組合などはますます役に立たないだろう。

農業恐慌を防ぎ、「農業の困難」を一度でとり除くためには、次のようなことが必要となる。

すなわち、土地の私的所有を社会的所有に変えることである。私的所有とともにこの私的所有の債務負担、すなわち抵当権もなくなろう。さらに、個別的生産価格（その差違から地代が生ずる）のかわりに、社会的な生産価格が設定されねばならない。これは、全部の土地の農業が単一の企業とみなされること、すなわち資本主義的商品生産の社会主義的現物経済への移行によってのみ可能である。それから、農業の過剰人口は過剰な農業人口を工業にふりむけることによって、ないし

パルヴス「世界市場と農業恐慌」(一) (大藪・鈴木)

は、社会的な労働者数と労働時間を個々の生産部門に合理的に分配することによって、防止されるにちがいない。そのためには、なお最後に、農業経営の技術的な組織と装置がつけ加えられるべきであろう。

いかにしてこの計画を發展させ、個々に実現させるべきかということは、別の機会に述べよう。

* * *

われわれは、われわれの研究の終結にきた。研究は、「ノイエ・ツァイト」というわくを考えてみても、もとより何ら科学的完全性を求めるものではない。多くの当該の重要な問題が全く無視されねばならなかったか、ほんのわずかしか述べられなかった。とりわけ、次のようなものがあげられる。

大土地所有と小土地所有の競争戦・農業の工業化・移民の諸条件・植民地の發展諸法則ならびに資本主義的過剰生産の諸条件。また、この仕事のプランにしたがって、政治的動向の説明も経済的な發展の描写と結びつけるべきであったが、それは、非常に心をそそるものではあるが、今回は除外せねばならない。

われわれにとって重要なのは、まったく一般的な諸関連の

みである。なぜなら、まさにそれこそがもつとも見過ごされているものであるから。

〔注〕

九 ユンカの幸福と不幸

A 生成過程

(1) 本稿六、「工業と農業」『ノイエ・ツァイト』第七号、五二二ページ以下参照。（本訳稿では省略）

(2) マイツ、エンは、確かに愛国的で善良なのだが、償却された手賦役と役畜賦役（一年あたり一½百万手労働日と五¼百万役畜労働日）の実際の価値を毎年五〇〇万、ターラー、だと評価している。償却の際になされたように二五年で資本還元すれば、これは、二、五〇〇万、ターラーになる。これに対して、再びマイツ、エンによれば、実際の賠償金、すなわち農民が物上げ負担からの解放の代償に支払ったものは、二、一四〇〇万ターラーである！ こうして農民たちは九千万ターラーだけ、つまり支払われた賠償金の一〇分の四だけまったくだまじとられたのである！（A・マイツ、エン、『プロイセンの土地および農業事情』第一巻、S・四三七）。

(3) 『メクレンブルク統計概要』第一巻、一八八八、八七ページ。

(4) 本稿六、第一八号、五五四ページ以下。

(5) 土地は地代の源泉として購入され得ないのだから、地代、

はそのものとして、土地から分離されて購入されるに違いなかった。それゆえ、「定期金売買 Rentenkauf」という前資本主義的の制度にロートベルトウスは夢中になった。しかし、もし資本主義的な定期金購入である抵当権が土地の価値によって非常に不安定にしか保障されないものだとすれば、それは、金属貨幣の保障のない、しかも大部分がしばしば偽りとなるような銀行券と同様に、役に立たないものとなる。

ロートベルトウスとその亜流はこの点において、かの痛ましい姿の騎士と同じである。彼らは、彼らがロマンチックな城主の奥方だとみなした彼らのドルンネアにみずからの活動をささげながら、彼女が重騎兵の長靴をはいた、火酒を醸造するユンカーであることをまったく認めようとしないのである。

ロートベルトウスがユンカーにきびしい真実を語ったということは何ら異論をはさむべきではない。しかし、それでも彼は、究極においては、ドルンネアは最も美しい婦人であることを主張し、何はさておき、ユンカーの土地所有のために闘ったのである——ユンカーの土地所有には十分気づかい、農民やブルジョアの資本家のそれには少しも目をくれずに。

(6) 「メクレンブルクの——そしてまたボンメルンの——大地所有者がその生産物を外国にふりむける瞬間、そして彼らの生産物の需要がそこで満たされて自国を次第にこの目的に従わせるようになった瞬間は、その地方の農村の諸関係がその本来的性格を失い、土地生産が貨幣の獲得という将来の傾

向の中に入り込み、したがってより大きな目標、つまり自分のわくをこえた目的さ、えも、追求することになった瞬間であった。このような瞬間は——いかにそれを別に特徴づけようとも——十分にはつきりと目にとどめることはできない。』土、地所有者の信用不足』K・F・ダイタヘルス。第二増補版『移住、労賃および地価』フランクフルトアムマイン、F・ボーゼル書店刊、一八六九年。

この書物は、六〇年代には若干の注目をひきおこしたが、今はまったく忘れ去られている。この書物はドイツのブルジョア経済学の中で資本主義的農業を最も洞察力をもって見たものの一つである。

(7) フリートリッヒ・エンゲルスは、最近公表された価値法則に関する研究(『ノイエ・ツァイト』一八九五―九六、第一卷「エンゲルス『資本論』第三部への補遺」……訳者、四一―一および三七―四四ページ)において、当時、すなわち都市の手工業の時代、そして一般に農業における自然経済の時代においては、商品は事実上ほほそれに含まれている労働量に従って交換されるとしているが、われわれはこれに同意できない。

エンゲルスは、農民と手工業者は、彼らの労働力以外の何も生産に投下せず、お互いの労働条件を知っているのだから、彼らの生産物を前もって支出された労働量にしたがってお互いに交換したのだ、と言っている。

たとえこの仮定が正しいとしても、そこから出てくるのは、

バルウス「世界市場と農業恐慌」(一)(大藪・鈴木)

労働時間にしたがって交換しようとする双方の意志、ただである。しかしながら主要な問題は、経済的な諸関係、すなわち社会的諸階級がそれぞれの生産諸形態の支配の下でお互いがおかれている諸関係がそのようなことを可能にするだろうかということである。

だが、この農民はグーツヘルに手賦役と役畜賦役と提供せねばならず、彼の労働時間はしばしば互いにごちゃまぜで、ある時にはグーツ経営に、ある時にはみずからの経営にふり向けねばならず、彼は、その上にさらに生産物の一部をグーツ所有者に支払わねばならず、しかもそれに対しては彼のほうではわずかの報酬しか得られなかった。さらに、彼は穀物から羊毛および亜麻布(それらは、おそらく、彼の妻・母・娘たちによってさらに加工される)までの、さらにバター・チーズ・獣脂・剛毛・鶏・卵など数多くの多様なものを生産し、収穫した生産物の大きな部分を自分の経営に原料および生産手段として即座に再投下し、さらに一部はみずからの生活維持のために使われる。また、この上に、彼の労働日は季節によって定まらず、また同様ではなく、彼は一人だけではなく妻と子供を含め、おそらくさらに老夫婦も働いており、それに加えてなお、その労働の生産性は天気とその他の偶然的事情に依存しているのである。一体、このような農民が、市場に運ぶ干し草を馬車につんだり、手工業者に売るために、穀物を袋に入れたり、卵をつんだり、バターをたるに詰めたりするような労働時間をどうして決められようか？

グーツヘルが手工業者と交換する時も、労働価値法則は同様にあてはまらない。グーツヘルが現物で支払う場合には、彼はそれを、彼に買納義務がある農民が納めてあった倉庫から出してくるのであり、それは彼にとつては、社会的に必要な労働時間が体現したもののよりも非常に少くみえる。貨幣で支払う場合には、その価値は彼がすでに交換から得ていたところのものである。

グーツヘルおよび他のすべてのものが商人と交易する場合には、労働時間は全く何の関係もなかった。商人は布・貴重品・香料・毛皮など、遠く離れた地方の生産物だけをもってきたが、輸送の途中で多くの困難と危険に出会っており、したがってそれらは独占価格をもった。

手工業者相互の交換においても、エンゲルスによつて前提されたような価値法則はあてはまらなかった。個々の手工業者によつて費された労働時間は、もちろん、算定しうるし測定することもできた——この計算は、後に資本主義的工場においてさらに非常に厳密にされている——、しかしながら、事態は、原料および生産手段の価値においては資本主義的生産におけるように進展しなかった。綿布およびピロッド織工、金細工師、毛皮職人および部分的には織物裁断職人も、原料を商人から買った。その限りで彼らは既成の商品価値で計算せねばならず、したがつてその価値形成においては、すでに述べたように、労働時間はきわめて従属的な役割しか果たさなかつた。錠前師・鋳器工・桶屋のような他の手工業者もま

た、一部は商人から、一部は農民から重要な原料を手に入れたに違いない。生産手段に対する支出においてさえも多くの手工業者では少なからぬものがあつた。しかし、とりわけ手工業者相互の交換に関しては、それが手工業者その他の社会的諸階級との交換によつて条件づけられていたということが考慮される。だから、主として、いかにして手工業者が農民・グーツヘルおよび商人と取り引きをしたかということに、彼の購買力が他の手工業者の労働に対してどれほど大きいかということが依存していたのである。

しかしながら、一つの社会階級にだけあてはまる、部分的な価値法則は一般にあり得ない。このことは、われわれに次のような一般的な考えをもたらす。つまり、資本主義的地代がまだ形成されていない限り——教科書に述べられている諸々の理由になお付け加えるならば、これはすでに工業の平均的な利潤率の存在を前提とする——、個別の穀物生産価格の一般的生産価格への平準化は何らおこらない。しかし、相異なる経営においては、土地収獲の差違の結果、同じ穀物量が相異つた価値をもつ。一袋の小麦はある場合は一二、ある場合は一五、そしてある場合は一八の労働時間を代表する。いまや、労働量にしたがつて交換すれば、手工業者は、明らかに、相異なる農業者の同じ労働に対して相異なる穀物量を交換においてうけとるに違いない。同じ上着がこちらでは一袋の小麦と、あちらでは一疋ないし一疋袋の小麦と交換可能である。だが、そうすると、都市においては一袋の小麦はどれ

だけの価値をもつのだろうか？ しかし、都市において穀物に対する一般的な市場価格が形成されるときには、労働量による規定はもはやあてはまらない！

価値法則が有効であるためには資本主義的地代を必要とする。それにはまたさらに利潤を必要とする。それゆえ、価値法則は、商品に含まれた労働量による商品の交換能力という単純な方法では表現されないのである。

エンゲルスの書いた歴史的叙述は、『資本論』第三巻の別の解釈を必ずしも排除し得ないある箇所に結びついている。『資本論』から他の説明がなされうるが、いずれにせよ、それは先に述べた解釈と矛盾する。われわれは第三巻からの次の引用で満足しよう。ここでは、まず始めに次のように述べられている。

「中世においては、イタリアのように例外的な都市の発展によって封建制度がうちこわされていることのないようないたるところで、農村が都市を政治的に収奪するとしたら、都市はいたるところで例外なしに、その独占価格・税制度・ツソ、フト制度・直接的な商人のごまかしおよび高利によって農村を経済的に収奪する」（『資本論』第三巻第Ⅱ部、三三四ページ）（邦訳、大月版『マルクス・エンゲルス全集』第三巻、一〇二六ページ）。

もちろん、われわれの説明は、ちょうど落下の法則を説明するために実験的に真空の空間をつくるように、労働量にもとづいて交換する独立の商品生産者という一つの抽象的な場

バルルス「世界市場と農業恐慌」(一) (大藪・鈴木)

合を考へうることを何ら排除するものではない。価値法則がこのように歴史的にみてあてはまったことがあるかどうかということは、その資本主義社会における妥当性にとっては無意味である。それは、ちょうど地上での落下の法則に対して大気圏外に完全な真空が存在するかどうかというのと同じである。

光線の直線の伝播の法則が屈折と反射という一見矛盾した現象の中でのみ貫徹しているように、また、地球によってすべての物質粒子が同じ引力をうけるという法則（周知のように、それによってすべての物体が同じ速さで落下することが条件づけられねばならない）が、異なる速度で落下するという、一見その法則が破棄されるような事実の中で貫徹しているように、価値法則もまた、それに表面的には矛盾しながら、その全法則性を別のものとしては決して説明できないようなものとして現象する。ちょうど物体が空気中を落下する際の法則性が、その性格上、矛盾として存在するように。

九 B 幻影的繁栄

(一) 「よく知られているように、どんなヨーロッパの国も、イギリスの恐慌の作用によって、ドイツほど直接的で広範囲かつ集中的に影響をうけるものはなからう。その理由は簡単である。ドイツはイギリスにとって最も大きな大陸の販売市場を形成しており、ドイツの主要輸出品目である羊毛および穀物はイギリスにおいてその大半の販売市場(Reich)を見

い出しているからである。」カール・マルクス、「新ライン新聞」第四号、一八五〇年の時評(邦訳、大月版『マルクス・エンゲルス全集』第一七巻、三〇一―二ページ)。われわれは、別のところで、それ以来いかにイギリスとドイツの貿易関係が変化したかを示した。

(2) 前掲の一八五〇年の「新ライン新聞」は、この諸関連をきわめて興味深く説明している。

(3) ロートベルトゥス『今日の地主の信用不足の解明と救済によせて』一八六八年。

(4) マイツェン、第三卷一一〇ページより引用。ロートベルトゥスも上述の信用不足に関する著作でこの資料を利用してゐる。

(5) コンラッド教授もこのような意見と同じであり、彼の国家学小辞典における「農業恐慌」に関する統計的総括はまったく大いに読むに値する。

(6) これは、五〇年代の比較的小さな信用不況であったが、それをロートベルトゥスの抵当権に関する最初の著作がひきあいに出した。『商業恐慌と地主の抵当不足』ベルリン、一八五八年)

どの著名な研究者とも同様に、ロートベルトゥスは彼の生きた時代からのみ把握せねばならない。彼の農業恐慌の理論が五〇年代および六〇年代の「抵当不足」によってつくられているのと同様に、彼の地代論もユンカー的農業の資本主義的發展の反映である。この發展を説明するためには、われわ

れの表面的なスケッチからもすでに示されるように、土地の質的差異、すなわち、リカードだけが知っていたような差額地代では十分でない。したがって、リカードに対するロートベルトゥスの反論、それは、もう少しで絶対地代の理論を發展させるところまでロートベルトゥスを導いた。

十 ロシアとアメリカの競争

(1) マックス・ゼーリング、『北アメリカ農業の競争』一八一ページ。

(2) この期間にロシアの輸入関税は三回引き上げられたが、それは純粹に財政関税(Finanzzölle)であり、他方における工業不況の結果とみなされる。

(3) かくして、われわれの研究の序文であげた外見上のパラドックス、すなわち「アメリカからの大量の輸入は、ヨーロッパの低い価格によって条件づけられている」(『ノイエ・ツァイト』第七号、一九八ページ)が明らかになる。一八六九年から一八七七年までに合衆国はその小麦生産の二三パーセントを輸出したが、一八七八年から一八九三年までは約三二パーセントであった。

(4) その際、相対的な消費は、ブレームンの人口一人当りで、一四・六キログラムから一〇九キログラムへと減少した。しかしながら、これは決して例外ではない。ユートン、エグによれば、ドイツの平均年間穀物消費は人口一人当り一八八〇―一八一年の一八五から一八八四―八五年の一七六キログラム

へと減少した。こうして可処分穀物量の相対的減少がおこり、他方において都市の穀物消費は、ブレイメンを典型とすれば、農村人口——これは、テキストにとりあげられた期間に約一六パーセントしか増大しなかった——よりも著しく増加したのであるから、したがって、農村人口は生産した穀物の絶えず増大する部分を都市に渡してきたのである。穀物価格が低下する時に穀物消費が後退し、穀物消費が後退する時に国内穀物流通が増大した。本稿五、「農業の矛盾」の三および四参照。

(5) 本稿三、『ノイエ・ツァイト』第九号、二八三ページ。